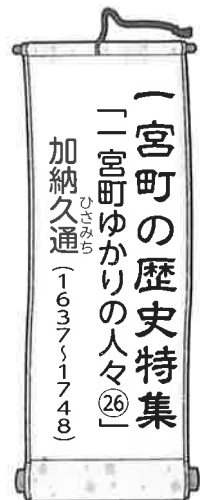


令和3年4月号



加納久通は紀伊国和歌山藩主・徳川吉宗(1684~1751)に仕えた人物です。享保元年(1716)、吉宗の江戸幕府8代將軍就任とともに幕臣となり、伊勢国(三重県)内で1千石を与えられました。翌年に1千石を増されたのち、享保11年(1726)には伊勢国、上総国などでさらに8千石を増され1万石の大名となりました。この時加増された領地の中に一宮本郷村、新笈村(現一宮町字一宮)などが含まれていました。当初は伊勢国八田(東阿倉川)に陣屋を置いたため、八田藩(東阿倉川藩)と呼ばれています。

吉宗の將軍辞任後も若年寄として仕え、寛延元年(1748)に76歳で死去しました。

写真は玉前神社が所蔵する古文書(掛け軸)で上が加納久通の書状、下が加納家家老・吉川久豊の副状(本文書に添えた書状)です。

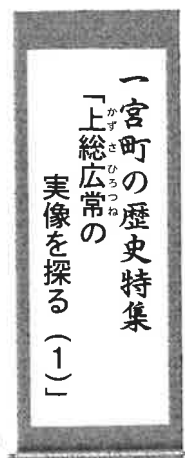
内容は宛先の南谷和尚という人物が久通が病氣の際、病氣平癒の祈禱をしてくれたことへのお礼状です。宛先の南谷和尚はどうやら久通が親しくしていた京都の僧侶のようですので、なぜこの文書が玉前神社に伝わっているのか、謎が残る資料です。



▲ 加納久通・吉川久豊書状(玉前神社所蔵)

【問合せ】教育課 (学芸員 江澤一樹) ☎(42) 1416

令和3年5月号



来年2022年の大河ドラマのタイトルは何か、皆さんご存知でしょうか。答えは「鎌倉殿の13人」。脚本は二宮幸喜さん、主人公である北条義時を俳優の小栗旬さんが演じます。

この大河ドラマ、タイトルを聞いてもピンとこない人が多いと思います。物語の舞台は平安時代末期から鎌倉時代初期です。タイトルの「鎌倉殿」は鎌倉幕府の棟梁、ないしは幕府そのものを指し、13人とは源頼朝死後の集団指導体制で中心となった御家人13人を指しています。つまり、この作品では鎌倉幕府初期の合議制の政治とその政治を巡る駆け引きが描かれていくことになります。

この物語の前半は幕府の成立までが描かれることになりましたが、その主要人物の中に、一宮ゆかりの上総広常がいます。4月15日、キャストの追加発表がされ、広常は俳優の佐藤浩市さんが演じることになりました。

広常については平成28年8月号の本コラムでも簡単に紹介しました。房総

地方に強大な力を持ち、幕府の成立に大きく貢献した人物ですが、最終的に頼朝に謀殺されてしまいます。そのため、いわゆる「敗者」として、その歴史は謎に包まれています。彼の実像に迫ることは、一宮の歴史を明らかにするだけでなく、日本史を考えるうえでも非常に重要なことです。

キャスト追加発表の予告の際、三谷さんは広常を「まさに鎌倉幕府をつくったのはこいつじゃないか」と言ってもいいくらいの人物」と称したうえで、「なぜか歴史にはほとんど残っていない」と述べられました。謎が多い広常。今回から数回にわたり、その実像を探っていきます。



▲ 上総広常(「本朝百将伝」明暦2年(1656)より、出典:国立公文書館デジタルアーカイブ)

【問合せ】教育課 (学芸員 江澤一樹) ☎(42) 1416

令和3年6月号

一宮町の歴史特集

「上総広常の

実像を探る(2)」

広常の実像に迫る前に、まず広常が表舞台に登場するまでの房総半島の歴史を見ていきたいと思います。

時は広常謀殺の寿永2年(1183)から約250年前まで遡ります。

天慶3年(940)、下総国(千葉県北部ほか)・常陸国(茨城県)を中心に起こった平将門の乱。これは関東での

平氏一族の抗争から発展し、将門による常陸国府(その国の役所)の襲撃という朝廷への反乱に至った事件ですが、

将門の死後、房総半島に登場したのが「両総(房総)平氏」と呼ばれる一族です。祖は将門の孫にあたる平忠常(?)

1031といわれ、下総国相馬郡(千葉県我孫子市、茨城県守谷市など)を中心に上総、下総の広範囲に領地を有し、強大な武力を有していました。

長元元年(1028)、忠常は原因は不明(利権をめぐる対立が原因か)ですが、安房国(千葉県南部)の国府を襲撃し、安房守平惟忠を焼き殺すという

事件を起します。その後忠常は上総国府をも占領、上総の国人たちは忠常

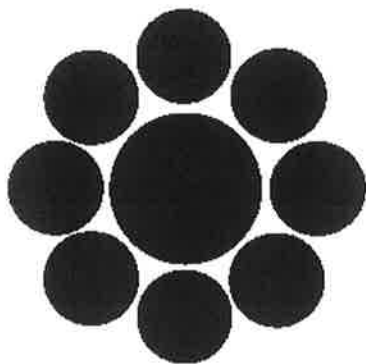
に味方し、房総半島を巻き込んだ大規模な朝廷への反乱となります(平忠常の乱)。

この乱は鎮庄までに約3年の月日がかかり、最終的に忠常が降伏、病死することによって終結します。しかしながら、3年もの間戦乱の舞台となった

房総半島は荒廃し、朝廷軍の収奪もあり、上総国では2万2千町あった作田(田んぼ)は、わずか18町まで減ったといえます(「左経記」)。

房総半島に大きな爪痕を残した忠常ですが、彼の子ども、常将(1010

〜76)らは許され、両総平氏は存続します。そしてこの常將以降、上総氏や千葉氏といった多くの氏族が輩出され、房総半島を中心にその勢力を発展させていくこととなります。



▲ 九曜紋。上総氏の家紋とされている。

【問合せ】教育課

(学芸員 江澤一樹) ☎(42)1416

令和3年7月号

一宮町の歴史特集

「上総広常の

実像を探る(3)」

今回は上総氏の成立とその展開を見ていきます。今回の話は少し難しいのですが、お付き合いください。

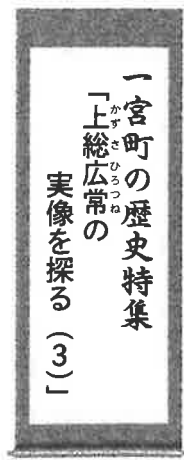
前回の最後で登場した平常将の孫に常家(?)?)という人物がいて、この人物が上総氏の祖といわれています。常家は後継ぎがないまま亡くなってしまうため、弟の常晴(?)?)が上総氏を継ぎます。常晴は下

総国相馬郡(相馬御厨)を領有していたため「相馬小五郎」と称し、上総権介となりました。その子孫は上総一國のみならず、下総国の大部分に在地領主として発展しており、常晴が両

総平氏の族長的立場を確立していたことがつかえます。

のちに隆盛を誇る千葉氏はこの常晴の兄にあたる常兼(1045〜1126)を祖とする一族です。

さて、常晴の子にあたるのが常澄(?)?)ですが、どうやら父とは折り合いが悪かったようで、常晴は兄の常兼の子・常重(1083〜1180)に相馬御厨を譲ったといえます。



結果これを機に、千葉氏と上総氏は相馬御厨をめぐる対立を深め、広常の時代までこの抗争は続きます。このような中で常澄は東国に勢力を伸ばしていた源義朝(1123〜60、頼朝の父)に接近、源氏との関係を強めることとなります。

保延2年(1136)になると、今度は下総守であった藤原親通が相馬御厨の領有を主張、義朝もこの問題に干渉し、千葉氏、藤原氏、源氏(上総氏)の三つ巴の争いに発展します。

このように混迷した状況の中で、登場するのが、常澄の子である広常です。広常もまた一族の争いの中を生き抜いていくこととなります。

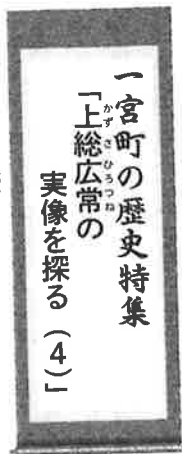


▲ 上総介塔 (神奈川県横浜市金沢区、2018年10月筆者撮影。上総広常の墓と伝えられている。)

【問合せ】教育課

(学芸員 江澤一樹) ☎(42)1416

令和3年8月号



一宮町の歴史特集
「上総広常の
実像を探る(4)」

近年、野口美氏(京都女子大学名誉教授)の研究により、上総氏の実像がだいぶ明らかになってきました。このコラムも野口氏の研究に因るところが多いのですが、野口氏は上総氏について、当時東国に割拠した小山・三浦・千葉氏といった有力武士団とは一線を画する圧倒的な勢力を保持する存在だったことを明らかにしています。

上総二国のみならず下総国の一部にまで勢力を伸ばしていた上総氏ですが、その地盤を引継ぎ、動乱の時代を生きたのが上総広常です。

広常の生年は残念ながらわかっていません。ただ諸資料に「介八郎」と見えることから、上総常澄の八男だったと見られます。

なぜ八男だった広常が上総氏(両総平氏族長)を継ぐことになったのか。この話は次回にするとし、謎に包まれた広常の前半生をみていきたいと思います。

広常の活動が見られるのは父・常澄在世中で、上総氏の惣領となる前の保元元年(1156)の保元の乱の

時です。この戦乱は皇位継承問題と摂関家・藤原氏の内紛により、後白河天皇(1127〜92)と崇徳上皇(1119〜64)が対立し、京都において武力衝突に至ったものです。広常は多くの東国武士とともに後白河天皇方の源義朝に従って戦い、勝利に貢献しました。

平治元年(1160)に発生した平治の乱の際にも広常は源義朝に従い、平氏と戦いました。『平治物語』には広常の奮戦ぶりが記されています。この乱の結果義朝は敗れ、東国に逃れる途中で殺されます。義朝の遺児・頼朝らは流刑となり、広常は平氏に従うようになったとみられます。

源義朝という後ろ盾を失った上総氏。このうち、一族間の骨肉の争いに身を投じることとなります。

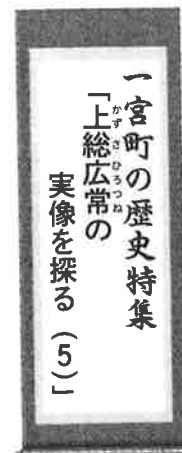


▲布施塚の石塔(2021年7月筆者撮影、いすみ市下布施2418)広常の供養塔と伝わる。

(学芸員 江澤一樹)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

令和3年9月号



一宮町の歴史特集
「上総広常の
実像を探る(5)」

なぜ八男だった広常が上総氏の家督(両総平氏族長)を継ぐことになったのか。前回保留したこの話題を今回は見ていきたいと思います。

当時は長男が家督を受け継ぐとは限らず、あくまでもそれは実力に応じたものでした。そのため広常が兄弟の中でも優秀だった可能性も考えられますが、広常が上総氏惣領となるまでには、一族の骨肉の争いがありました。

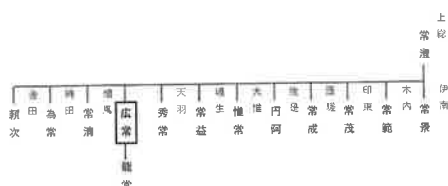
源義朝が亡くなったことは上総氏に大きな動揺をもたらしました。上総氏は義朝を擁立していたことにより、一族の統制を保っていたためです。そのような中義朝の死後もなくして広常の父・上総常澄も亡くなります。

上総氏を継いだのは常澄の長男の伊南常景(???)でした。常景は安房国の長狭氏と姻戚関係を結び、安房へもその勢力を拡大しようとしています。しかし次弟(常澄の次男)の印東常茂(??1180)が常景を殺害、上総氏惣領の座を強奪します。

このような経緯で常景は上総氏惣領となつたため、一族の多くは常景が

ら離れ、弟である広常の許に去つていったといえます。常景は平氏と結びつくことにより、地盤を固めようとはしました。一方で広常は平氏に従ってはいないものの、かつては平氏と敵対した身であり、立場は極めて微妙なものでした。

常景の殺害は長寛年間(1163〜65)とも言われていますが、はっきりとわかっていません。ただ、この対立関係は源頼朝が挙兵する治承4年(1180)まで続いています。この頃には広常は上総氏の惣領としてある程度地位を確立していたようですが、常景はまだ健在でした。一族間の不穏な空気を抱えた中で、源平合戦を迎えることとなります。



▲上総氏略系図
(両総平氏に関する系図は数多く伝来しており、不確定である。この略系図は総合的に見て信ぴょう性の高いものを採用しているが、広常が九男に位置づけられている。)

(学芸員 江澤一樹)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416

「一宮町の歴史特集」

「上総広常の
実像を探る(6)」

実像を探る(6)

治承4年(1180)の源頼朝

(1147~99)の挙兵は、広常の運命を大きく変えることとなります。頼朝の挙兵を成功づけたのは広常が味方したからだとも評価されている通り、広常が平氏に付いていた場合、おそらく鎌倉幕府は成立していなかったでしょう。当時、上総氏は源氏の力を必要としないほどの圧倒的な軍勢力を有していたといわれています。なぜ広常は頼朝に味方したのでしょうか。

これまでのコラムでも書いてきた通り、もともと上総氏は源氏と関係の深い一族でした。頼朝はかつて上総氏が頼りにした義朝の子であり、その関係はこの要因といえます。

そもそもこの二つの要因は、広常と平氏の関係があまり良くなかったとみられることにあります。対立関係にあった兄・常茂が平氏を頼っており、さらに治承3年(1179)には平氏の有力家人(家来)であった伊藤忠清(??)1185)が平氏によって「上総介」に任じられました。これは平氏が広常を上総国の支配者だと認めていなかった

ことを示唆しています。軍記物『平家物語』にはこれに対して陳弁のために京都へ上洛した広常の嫡子・能常(よつね)が平氏によって禁獄(拘束)されたこと記されています。

このように、広常は平氏に不満を抱いており、平氏に付くという選択肢はあまりなかったのではないかと考えられます。広常は頼朝に与すること、一族間の争いに終止符をうち、自らの立場を盤石のものにしようとしていたのではないのでしょうか。

頼朝にとつては東国平定・平氏打倒のために、上総氏の助力は極めて重要なことでした。一方で広常にとつても現状打破のために、頼朝が必要な存在でした。このようにお互いの利害が一致したことで、頼朝の挙兵は成功に導かれることになったのです。



▲伝上総広常屋敷跡
神奈川県鎌倉市十二所、2018年10月筆者撮影。朝比奈切通入口付近にある

【問合せ】教育課 (学芸員 江澤一樹) ☎(42) 1416

「一宮町の歴史特集」

「上総広常の
実像を探る(7)」

実像を探る(7)

広常の最も有名なエピソードは源頼朝の挙兵時に遅参したとされていることではないのでしょうか。これは鎌倉幕府の正史『吾妻鏡』に記載されているのですが、今回はそのエピソードを見ていきましょう。

治承4年(1180)、京都にて以仁王(1151~80)が平氏打倒のために挙兵、全国の源氏に挙兵を呼びかけます。以仁王は討死しますが、挙兵の令旨(皇太子の命令文書)を受け取った頼朝は8月中旬に伊豆国(静岡県)で挙兵します。

その後石橋山の戦いで頼朝は平氏に敗北、8月末には安房国へ逃れます。そこで頼朝は上総氏、千葉氏に協力を依頼します。千葉氏はすぐに参陣しますが、広常は「千葉常胤と相談して参陣する」と答えず、ぐには参陣せず、頼朝が千葉氏らを率い、武蔵国(東京都ほか)の隅田川に至ったところで2万騎の軍勢を率いて参陣しました。広常は「二箇の存念(協力)するか、場合によってはその場で頼朝を討ち取るか)をもって参陣しましたが、頼朝から遅参したことに對して叱責を受けます(大軍を率いてきたので称賛されると広常は思っていた)。そのような毅然とした頼朝の態度に広常は心を変え協力することになりました。

ぐっと概要はこのような感じですが、

前回も書いたように、これまでの背景を考えると、広常が源氏につくことを躊躇したとは考えづらい、といえます。ましてや常胤と相談してから、というのも当時の千葉氏と上総氏の勢力関係(上総氏が圧倒的優位)を考慮しても難しいのではないのでしょうか。

そこでこのことが記されている『吾妻鏡』という史料の性格を考えてみましょう。この史料は幕府が作った歴史書です。すなわち、幕府に反抗的な、都合の悪い人物や事象は事実を歪曲して記す可能性を考慮しなくてははいけません。広常はこのうち頼朝に謀叛心を抱いたとして誅殺されているので、『吾妻鏡』では広常のことをあまり良く書かない傾向が見られます。

すなわちこの『吾妻鏡』の記述を鵜呑みにすることは危険性をはらんでいるということになります。では事実はどうだったのか。他の史料とも照らし合わせながら考える必要がありますが、紙幅が尽きたので、その話は次回としましょう。



▲戦前の玉前神社(絵葉書、町教委所蔵)
広常は玉前神社を中心とした玉前荘を拠点としていた。なお、広常の時代の玉前神社は別の場所にあったと思われる。

【問合せ】教育課 (学芸員 江澤一樹) ☎(42) 1416

令和3年12月号

一宮町の歴史特集

「上総広常」

実像を探る(8)

前回から引き続き、源頼朝挙兵時の広常の行動について、どのように考えるべきか、今回は見ていきます。

広常の参陣が遅れた、ということとは『吾妻鏡』以外の史料でも記されており、それを悪い意味で捉えてよいのかという点が焦点となります。

ここで当時の広常の置かれた状況に立ち返ってみましょう。広常は多くの一族から支持を受けていたものの、兄の印東常茂は健在でした。また上総国府(市原市)周辺も平氏勢力が抑えていたと見られています。

すなわちこれらの勢力を排除しなくては、広常のみならず頼朝の安全も保障されない状況ということになります。また、広常は「大軍を率いて頼朝のもとに参陣した」といいます。『吾妻鏡』の二万騎という数値は誇張があるにせよ、大軍を集めるには当然ながら時間がかかります。

以上のことから、広常の「遅参」の原因として、①上総国の反頼朝勢力の掃討をしていたこと、②大軍を集めるのに時間がかかったこと、が推測されます。『吾妻鏡』の記述のみでは悪い印象を受けがちですが、このように考えた方がよいのではないかと

と思います。

さて広常が頼朝軍に合流したのち、武蔵国(東京都ほか)などの有力者も頼朝に味方、頼朝軍はさらなる大軍となります。さらに頼朝の命令により、千葉常胤が印東常茂の子・伊北常仲を討ち取ります。

大軍を率いて駿河国(静岡県)へ進軍した頼朝軍は甲斐国(山梨県)で挙兵した源氏軍とともに、治承4年(1180)10月中旬に富士川で平氏軍と決戦、これに勝利します。この勝利により頼朝は南関東における立場を確立することとなります。そしてこののち、頼朝は関東の支配を目指し、北関東の反頼朝勢力との戦いに身を投じることになります。

一方広常はこの富士川の戦いで、兄の印東常茂を討ち取ることに成功します。広常もまた、一族間の争いに終止符をうつことができたのです。

令和4年1月号

一宮町の歴史特集

「上総広常」

実像を探る(9)

いよいよ大河ドラマ「鎌倉殿の13人」が始まりました。今回は広常の活躍がみえる金沙城の戦いをみていきましょう。

治承4年(1180)10月中旬、富士川の戦いで平氏を破った頼朝は、そのまま上洛(京都へ上ること)を目指そうとします。ところが広常、千葉常胤、二浦義澄らが「上洛よりも、常陸国(茨城県)の佐竹氏を討伐すべきだ」と進言し、頼朝軍は反転して常陸国へ進軍します。

この時佐竹氏の当主は京都におり不在であり、頼朝に対峙したのは当主の子の佐竹義政(1180)、秀義(1151-1226)兄弟でした。まず広常は自分の縁者にあたる兄の義政を誘い出し、謀殺します。これに動揺した佐竹氏の中には逃亡したり、頼朝に寝返る者も出てきましたが、秀義は金沙城(茨城県常陸太田市)に立て籠ります。

11月5日、頼朝軍は金沙城を攻撃しますが、難攻不落の要害で守りは強固でした。そのため、広常の献策により、城に籠城しておらず、城の造りに詳しくあった秀義の叔父・義季を味方につけます。義季の案内により城は落城、秀義は奥州へ逃亡します。この戦いの結果、常陸国の大部分が頼朝の支配下となりました。

広常らが佐竹氏討伐を進言した理由

は、所領問題があったためとの説もあります。香取周辺には広常の所領があり、近接する佐竹氏を排除することで所領の安定を図ったとみられます。

またその一方で佐竹氏攻めは広常らの進言というよりも、頼朝自身の意思だったのではないかとの説もあります。佐竹氏の領地は強大な勢力を有していた奥州藤原氏の領地への玄関口であり、ここを抑えることで西国の平氏攻めにあたり、後顧の憂いを立つことが目的だったのでないか、といわれています。

いずれにせよ、この戦いの結果、関東に残る平氏方の最大勢力・佐竹氏を追いやることに成功、頼朝は関東での地盤をより盤石のものとします。広常は頼朝の関東制圧の過程で、「軍事」という面で大きな役割を果たすことになったのです。



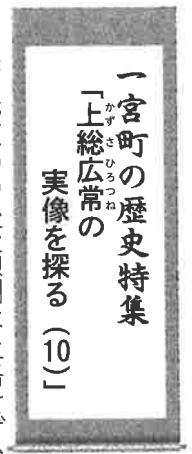
▲尾骨
いすみ市山田1304付近、2021年7月筆者撮影、広常が頼朝の元へ参陣する際、この地で広常の愛馬が尾骨を折って倒れた(のちに始末され埋葬される)と伝わる。

【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (学芸員 江澤一樹)



▲真常寺石塔
(御宿町上布施1474。御宿町指定史跡。2021年11月筆者撮影。広常の供養塔と伝わる。)

【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (学芸員 江澤一樹)

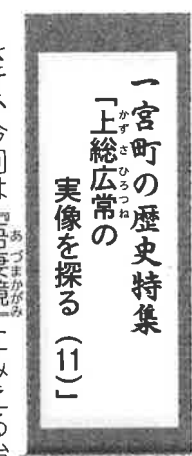


佐竹氏攻めの後、頼朝は上洛せず、しばらく東国の支配に力を注ぐようになり、その理由はいまだ頼朝の地盤がしっかりしておらず、この時点ではあくまでも頼朝は朝廷に対する「謀叛人」の立場でしか過ぎなかったことが挙げられます。

一方、平氏も頼朝の討伐軍を出せずにいました。以仁王の命令により、平氏もまた西国の安定を図る必要があったのです。また、この時西国では大飢饉が発生、治承5年(養和元年、1181)2月には平清盛が急死するなど、平氏政権では動揺が広がっていました。

そのため、しばらく頼朝と平氏の争いは小康状態となります。ここからは確認できる広常の頼朝政権下の動向をみていきましょう。

頼朝は治承4年(1180年)12月、鎌倉に新築された御所(大倉御所)へ移ります。それまで頼朝は鎌倉の広常の館に滞在していたといえます。頼朝が鎌倉に滞り、広常が鎌倉に館を持つていたことを示唆しており、広常の力が鎌倉にまで及んでいたことが推察できます。



翌治承5年2月には頼朝の斡旋により、信濃(長野県)の小笠原長清(1162~1242)に広常の娘が嫁ぎます。ちなみにこの2年後に広常が謀殺された際、長清夫妻は連座(罪を犯した人物の一族にまで処罰されること)することなく、広常の所領の一部が長清の妻に与えられています。

そして『吾妻鏡』にはこの治承5年の話として、広常の無礼な振る舞いが目立つという有名な2つのエピソードが記されています。『吾妻鏡』の記述の信憑性という問題はありませんが、この時期、頼朝と広常の関係が悪化していた可能性があります。頼朝の挙兵を成功させた広常と助けられた頼朝、その両者の関係はわずか1年足らずで、暗雲が立ち込めてくるのです。今回はこの2つのエピソードを紹介しましょう。



▲大倉御所跡
神奈川県鎌倉市雪ノ下3-11、2018年9月筆者撮影、頼朝は鎌倉の広常の館からこの場所へ移ったという。

【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (学芸員 江澤一樹)

さて、今回は『吾妻鏡』にみえる治承5年(1181)に起きた広常にまつわる2つの出来事を見ていきましょう。

6月19日、源頼朝が納涼のため三浦半島を訪れました。かねてからの命令を受け、広常は佐賀岡浜という場所(郎従(部下)50人余りを従えて頼朝を出迎えます。頼朝が来ると郎従たちは下馬して平伏しましたが、広常は馬上で深く頭を下げたのみでした。

これに対し、佐原義連(???)が下馬を促したところ、広常は「公私三代の間、未だその礼をなさず(私を含めた)上総氏の(三代に亘り、)源氏に対して(下馬の礼をとったことがない)」と答えたといえます。

さらにその後に行われた酒宴の場で出席者が酒に酔っている中、岡崎義実(1112~1200)が頼朝の着用する水干(装束)を所望します。頼朝は望み通り水干を与え、義実はその場で着用しました。

これに対して広常は妬み、「そのような美服は自分こそが拝領すべきであり、義実のような老人が賞せられるのは予想外のことだ。」と述べまし

た。義実は「広常の功績は自分が当初に挙げた忠節とは比べ物にならない、同じように考えるな。」と言い返し、両者は一触即発の状況になったといえます。結果佐原義連が仲介し、その場は収まりました。

この2つの出来事は、広常の傲慢さを伝えるものとして、よく取り上げられます。『吾妻鏡』という史料の性格上、信憑性を疑わなければなりません。似たような出来事はあったのではないかと推察されます。

酒宴の場での諍いの際、頼朝は言葉が発しなかったと記されています。これは何を意味するのでしょうか。広常に対し、何か思うところがある、ということを示しているのでしょうか。当然、頼朝にとっては、この出来事は好ましくないことだったのでしようし、広常に対する疑念を抱くことになるきっかけの一つだったといえるでしょう。



▲金光寺の石塔
いすみ市大原、2021年11月筆者撮影。金光寺は広常の菩提院といわれている。

【問合せ】教育課 ☎(42)1416 (学芸員 江澤一樹)